

論題	幕末期の日露関係資料について―「海の学び調査・研究サポート」支援事業報告―
著者	嶋村元宏
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学― 第43号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2016年(平成28年)12月
判型	A4(210mm×297mm)

## 幕末期の日露関係資料について

—「海の学び調査・研究サポート」支援事業報告

嶋村元宏

### 【キーワード】

ラクスマン、レザノフ、プチャーチン、海洋教育

### 【要旨】

本稿は、公益財団法人日本海事科学振興財団・船の博物館の支援事業である「海の学び ミュージアムサポート」のうち、「海の学び調査研究サポート」による助成金で実施した調査研究の報告である。

調査機関ならびに調査地は以下の通りである。(1) 天理大学附属図書館、(2) 大黒屋光太夫ゆかりの地、(3) 大黒屋光太夫記念館、(4) 松前城周辺ロシア使節ラクスマン応接地、(5) 函館市中央図書館、(6) 北海道大学附属図書館、(7) シパンベルグ上陸地周辺(野付半島・北海道野付郡別海町)、(8) ラクスマン・ロシア使節入港地周辺(根室港・北海道根室市)、(9) もりおか歴史文化館、(10) 古河歴史博物館(茨城県古河市)、(11) 宮城県図書館、(12) 北見市立中央図書館、(13) 長崎市内日露関係地(長崎県長崎市)、(14) 長崎歴史文化博物館、(15) 長崎港周辺(長崎県長崎市)、(16) 真田宝物館、(17) 葦山反射炉、(18) 戸田造船郷土資料博物館、(19) 戸田湾周辺(静岡県沼津市戸田)、(20) 下田湾周辺地(静岡県下田市)。

この成果は、平成二八年八月から「海の学び調査研究サポート」の助成金を得て実施している学習支援プログラムの開発に活用する予定である。

はじめに

総延長約四二八kmの海岸線を有する神奈川県は、江戸時代には江戸への異国船の侵入を防ぐため、房総半島側とともに三浦半島にも多くの台場が築造された。この台場の整備を含む海岸防禦(海防)体制の構築や海防論が活発となるのは、開国への衝撃を与えたとされるペリー来航より一〇〇年程さかのぼる一八世紀後半からであり、神奈川の歴史ならではの海防について考える場合、一八世紀後半以降頻繁に日本近海に姿を現すようになった異国船、特にロシア船への対応について考える必要があることはいうまでもないことである。

当初筆者は、神奈川県①の歴史にとっても重要なこの「海防」をテーマとする特別展の準備として、日露関係資料の調査を予定していたところ、幸いにも公益財団法人日本海事科学振興財団・船の科学館による「海の学び ミュージアムサポート」事業のうち、「海の学び調査・研究サポート」による支援を得られ、②それにより、寛政四年のラクスマンの来航以降嘉永六年のプチャーチンの長崎来航までを中心とする日露関係資料の収集を重点的に進めることができた。

本稿は、その調査研究活動の報告である。以下、調査地ごとに主要な資料を中心に紹介していくことにしたい。なお、多くの資料は過去に展覧会や学術研究で利用されたものも含まれている。既知の資料を紹介することに意義をみいだせないとの意見もあるが、先に述べたように今回の調査研究活動が、特別展開催のための事前準備であり、かつ本稿が支援事業の成果報告としての性格を有していることから、既知の資料も含め紹介することにした。

## 一 調査の概要

今回の調査では、各施設が所蔵する資料の閲覧・撮影に加え、ラクスマンをはじめとするロシア使節の来航地など現地調査もあわせて行った。その概要は、以下の通りである。

(1) 天理大学附属天理図書館(奈良県天理市) 平成二十七年七月二日  
日露関係資料「北狄事略」、「ヲロシア人物并小屋内図」他一点を閲覧し、展示での活用を探った。

(2) 大黒屋光太夫ゆかりの地(三重県鈴鹿市) 平成二十七年七月二日  
大黒屋光太夫記念館が設立されている鈴鹿市若松は、光太夫生誕地であり、また前日二日に宿泊した鈴鹿市白子<sup>しろこ</sup>は、光太夫が漂流前に出港した湊【写真1】であったことから、光太夫に関連して設置された供養塔(鈴鹿市指定文化財)や記念碑【写真2】などを調査した。



写真1

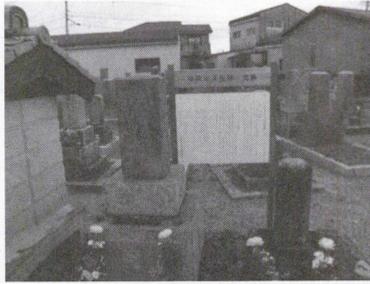


写真2

(3) 大黒屋光太夫記念館 平成二十七年七月二日

大黒屋光太夫記念館を所管する鈴鹿市文化振興部代田美里、前田有紀両学芸員から資料に関する解説を受けつつ、大黒屋光太夫の遺品類、光太夫直筆のロシア文字の書などを閲覧し、江戸時代後期における日露関

係の端緒となった光太夫の歴史的位置について再確認を行った。

(4) 松前城周辺ロシア使節ラクスマン応接地(北海道松前郡松前町) 平成二十七年八月三十一日

寛政四(一七九二)年に根室に来航したロシア使節ラクスマンは、翌年箱館(函館)から当時蝦夷地を支配していた松前藩の居城がある松前まで陸路で移動したことから、その足跡をたどると共に、応接地周辺の現況を調査した【写真3 沖口役所跡、写真4 松前湊】。

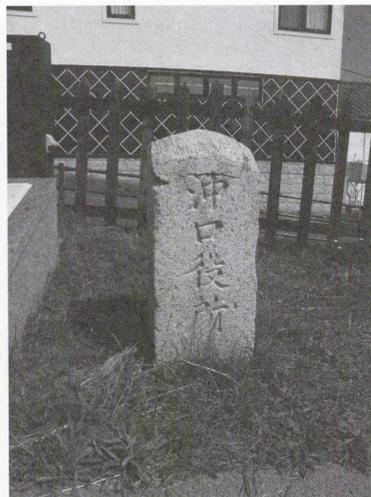


写真3

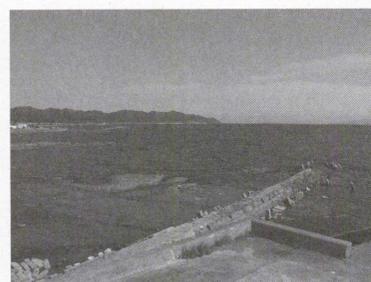


写真4

(5) 函館市中央図書館(北海道函館市) 平成二十七年九一日

函館市中央図書館所蔵日露関係資料六件二五点を調査・撮影し、特別展示における効果的な展示方法について探った【写真5 寛政五年癸丑六月松前侯ヨリ魯西亜人へ被論候書、写真6 神風記】。

(6) 北海道大学附属図書館 平成二十七年九月二日

北海道大学附属図書館北方資料室所蔵日露関係資料6件を調査・撮影し、特別展示における効果的な展示方法について探った【写真7・8 寛政五年癸丑年異国人御応対場浜御屋敷右之外塀目南部津軽松前家二而警護之右大略之図】。

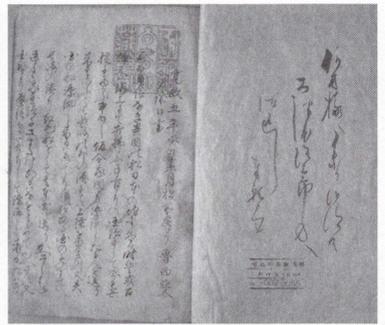


写真 5



写真 6

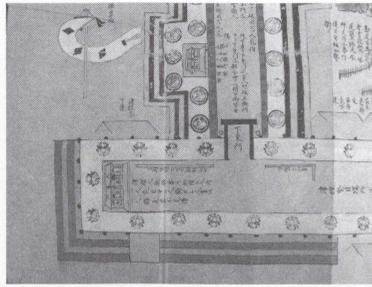


写真 7

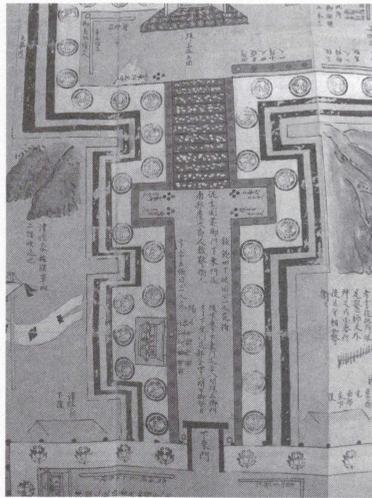


写真 8

(7) シパンベルゲ上陸地周辺 (野付半島・北海道野付郡別海町) 平成

二七年一〇月二〇日

ロシア人が初めて蝦夷地に上陸した地である野付半島の原風景を確  
認、撮影した。

正式なロシア使節として派遣されたラクスマンが、寛政四年に根室へ  
来航する以前に、ロシアの探検隊がはじめて蝦夷地上陸したのがこの  
野付半島であった。ここは今日まで、大規模開発が行われていないこと  
から、当時の原風景をとどめていると考えられる【写真9・10】。

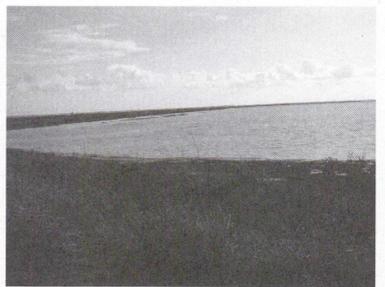


写真 9



写真 10

(8) ラクスマン・ロシア使節入港地周辺 (根室港・北海道根室市) 平  
成二七年一〇月二一日

根室市歴史と自然の資料館・猪熊樹人学芸主査の案内により、根室へ来  
航したラクスマン縁の地をめぐり、最新の研究成果にもとづき、現地の  
状況を確認すると共に、撮影を行った。訪問地は、根室港弁天島(ロシ  
ア使節上陸・宿营地)【写真11】、高台にある金比羅神社(当時の画像資  
料にも描かれている根室港を鳥瞰するため)、ロシア商人上陸・宿营地(国  
道五三号付近)【写真12】である。

調査日である一〇月二一日は、一七九二年一〇月二〇日にラクスマン  
が根室港の弁天島へ上陸した日とほぼ同じであり、気候・海の状態も当  
時と同じであった。

(9) もりおか歴史文化館(岩手県盛岡市) 平成二七年二月八日〜九日  
寛政一一(一七九九)年、江戸幕府が蝦夷地を直轄したことにより、そ  
の警衛を担わされた盛岡藩の活動状況を知るため、南部家文書中の関係  
資料について、調査並びに撮影を行った。特に、レザノフの配下によつ  
てエトロフが襲撃された際の対応に関する資料を得た【写真13 松前陣  
立図】。

(10) 古河歴史博物館 (茨城県古河市) 平成二七年二月一七日  
 学芸員立ち会いのもと、重要文化財「鷹見泉石歴史資料」に含まれる  
 日露関係資料の閲覧・撮影を行った。調査対象資料には、古河藩家老鷹  
 見泉石自らがロシア語文献を写した資料や、大黒屋光太夫から直接贈呈

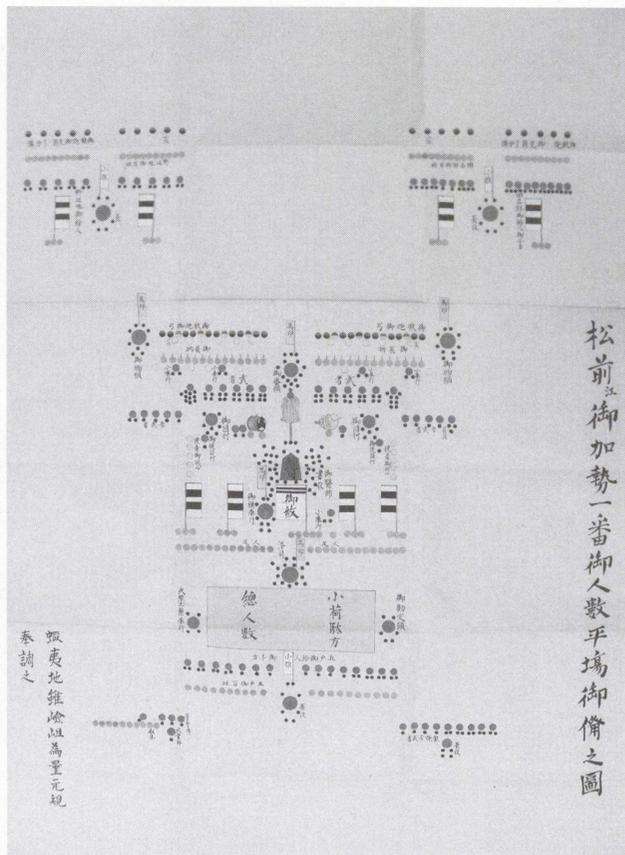


写真 13

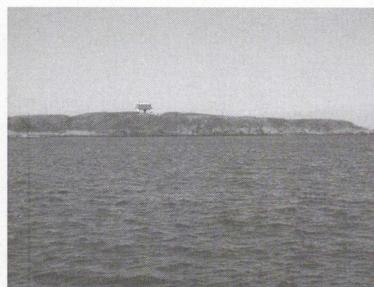


写真 11



写真 12

(11) 宮城県図書館 (宮城県仙台市泉区) 平成二七年二月一八日  
 蘭学者大槻玄沢直筆本などのロシア関係資料を熟覧し、展示等に活用可能な部分を中心に撮影した【写真16  
 大槻茂質 魯西亜来航紀事、写真17  
 同 魯西亜諸書留写】。

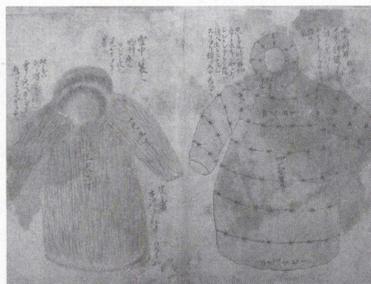


写真 14

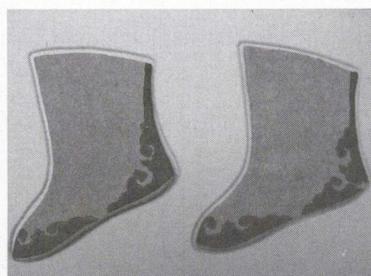


写真 15

されたロシア語の書付等が含まれ、当時のロシア情報の収集活動を具体的に示すものであることを再認識できた【写真14 鷹見泉石歴史資料の内 北寇秘録 ロシア人エトロフ乱妨一件 一、写真15 同 室内履】。

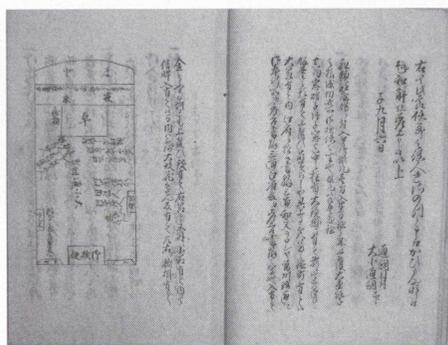


写真 17

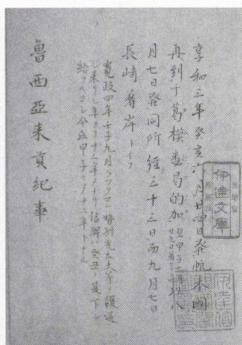


写真 16

(12) 北見市立中央図書館（北海道北見市） 平成二八年二月六日

文化三年から翌四年にかけて、ロシア軍艦が蝦夷地を襲撃した事件の対応について、老中・松平定信が自ら認めた草案である『松平定信筆「蝦夷地一件意見書草案」四巻』【写真18・19】を閲覧・撮影した。

この資料は、すでに藤田覚氏により紹介・利用されているが、一般人にはまだ知られていないものであり、特別展示で出品することは意義あるものと考えられる。

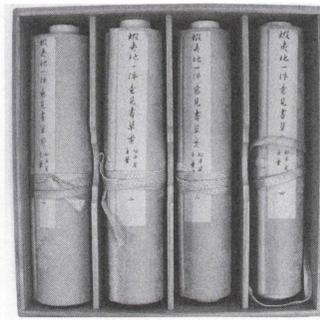


写真 18

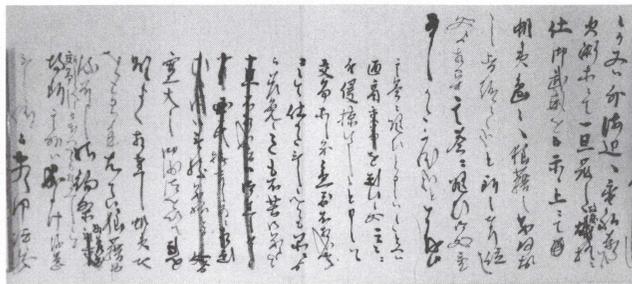


写真 19

(13) 長崎市内日露関係地（長崎県長崎市） 平成二八年二月一六日

一八〇四年に来航したロシア使節レザノフが幕府の許可を得て仮宿泊所とした場所の現在地【写真20】ならびに、一八五九年以降来日したロシア人に関係の深い、稲佐山地区に点在する史跡【写真21 悟真寺山門】を実見し、撮影を行った。

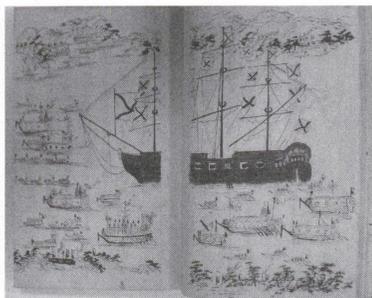


写真 22

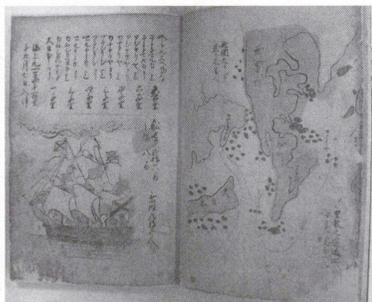


写真 23



写真 20



写真 21

(14) 長崎歴史文化博物館（長崎県長崎市） 平成二八年二月一七日

長崎歴史文化博物館所蔵の日露関係資料一六点を閲覧し、重要箇所について撮影を行った。また、深瀬公一郎学芸員より、長崎湾へ入港する船の航路について、貴重な情報を得た【写真22 俄羅斯亜渡来書 文化2年 魯西亜船風訳書 文化16己巳年】。

(15) 長崎港周辺 (長崎県長崎市) 平成二八年二月一八日

来航した外国船が必ず碇泊を義務づけられた高鉾島【写真24】、長崎台場周辺【写真25】、長崎湾の入口にあたる伊王島周辺を実見し、撮影を行った。また、長崎湾の南部と西部を結ぶながさき女神橋から長崎市街地へ向かう航路を実見するとともに、当時とほぼ変わらない航跡を撮影した。

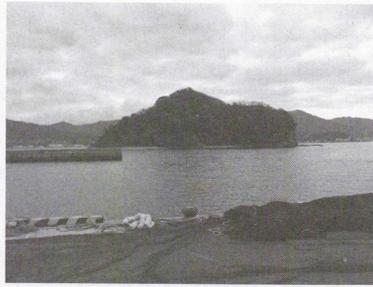


写真 24



写真 25

(16) 真田宝物館 (長野県長野市松代町) 平成二八年二月二八日～二九日

アヘン戦争が勃発した天保期に、水野忠邦を首班とする幕閣において、古河藩主土井利位とともに、海防掛老中に任じられた松代藩主真田幸貫のもとに遺された海防関係史料【写真26】 奥州与松前地接境海門大概図、写真27 近海航路并直径里数図】について閲覧・撮影を行った。

もともと海防強化を唱えていた幸貫のもとに、ラクスマンやレザノフに関する資料も遺されていることを確認した。

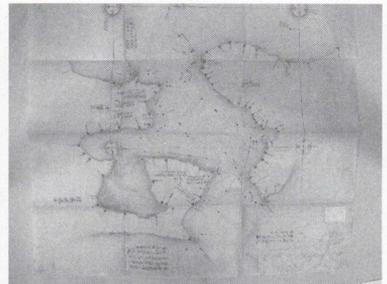


写真 26

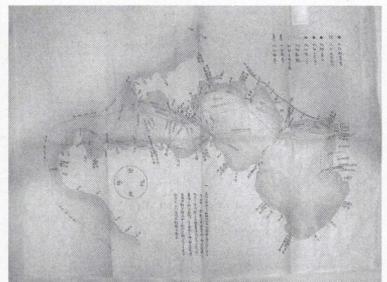


写真 27

(17) 葦山反射炉 (静岡県伊豆の国市) 平成二八年三月一〇日  
葦山反射炉【写真28】は、大砲を鑄造するため建造され、実際に稼働したものであり、実見することによりその構造について理解を深めることができた。

○日 (18) 戸田造船郷土資料博物館 (静岡県沼津市戸田) 平成二八年三月一

戸田は、日本人工が、ロシア人の指示のもと沈没したロシア軍艦デアナ号の代替船を建造した地であり、戸田造船郷土資料館にはそれに関する資料が展示されている。日露友好に関する資料も所蔵することを確認した。

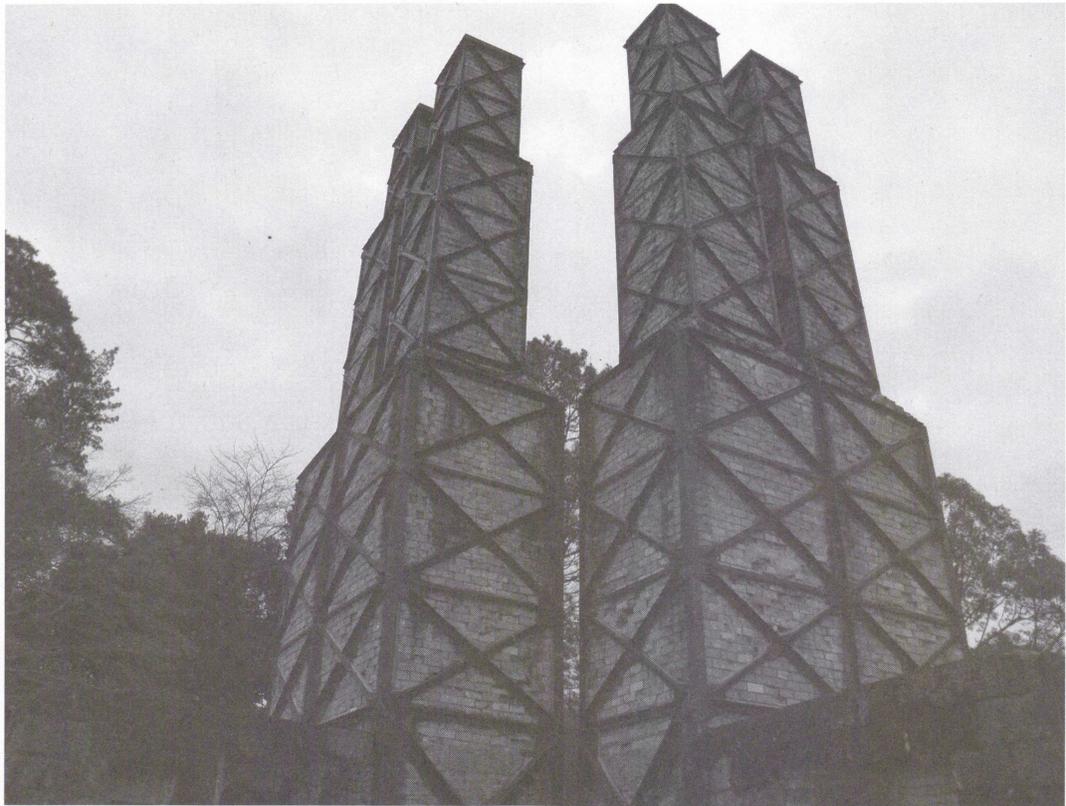


写真 28

(19) 戸田湾周辺 (静岡県沼津市戸田) 平成二八年三月二〇日  
 安政二(一八五五) 年下田に來航したロシア使節プチャーチンが乗る  
 ディアナ号が沈没したさい、その代替船を建造するため一時ロシア人が  
 逗留していた地域【写真 29・30・31 ディアナ号の錨(沼津市戸田造船  
 郷土資料館玄関前)】を調査した。



写真 29

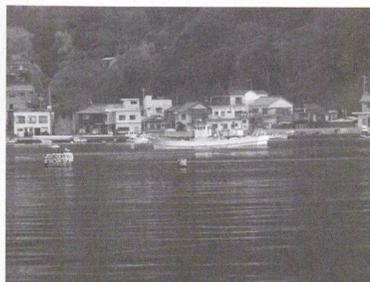


写真 30



写真 31

(20) 下田湾周辺地 (静岡県下田市) 平成二八年三月一日  
 ペリー艦隊の乗員が上陸した地点とされる犬走り島周辺をはじめ、「和  
 親」条約により開港場となった下田の状況について調査を行った。

むすびにかえて

日本の開国については、日本とはじめて条約を締結したアメリカに目が注がれがちであるが、「鎖国」を揺るがす契機となったのは、ロシアであったことを等閑にすべきではない。工藤平助が『赤蝦夷風説考』を、また林子平が『三国通覧図説』や『海国兵談』を執筆したのは、ロシアが日本へ進出するという情報に触れた<sup>(3)</sup>からであり、ロシアの日本への進出が「鎖国」体制を揺るがす要因になり得るとの認識を識者に与えたことは確かなのである。そして、そこから始まる海防論や寛政五年に老中松平定信がはじめて海防掛として行った海防巡検とそれにもとづく海防強化は、江戸に近接し三浦半島および相模灘に面した海岸線を有する神奈川県にとって重要な歴史の一部であり、当館としても日露関係資料の収集にも力を入れることは必然であろう。

国際法に基づく「和親」条約、そして神奈川（横浜）開港を決定つけた通商条約をアメリカとの間に結んだことから、主として資料を当館では収集の対象としてきた。今回の調査研究活動は、日露関係資料の充実を図ることも当館としての重要な役割であることをあらためて認識する機会であった。

なお、本調査研究の成果は、平成二八年八月よりあらたに「海の学び 調査研究サポート」の支援を得て実施している「開国」をテーマとした学習支援プログラムの開発に関する基礎的研究」において活用する予定である。

註

(1) 平成二八年夏の開催を予定していたが、当館が空調設備等改修工事により、展示事業を約二年間休止することとなったため、現在平成三〇年度以降の開催を目指している。

(2) 研究題目「海にまもられた日本」―北方の海からの開国に関する基礎的研究―  
(研究代表者・嶋村元宏) 平成二七年六月～平成二八年五月。

(3) 実際は信憑性のない情報であったが、信憑性の有無に関わらず、「ロシアが日本に進出する」という情報が工藤や林に筆を執らせたことは疑いのないことである。沼田哲「近代を見る目」(辻達也編『日本の近世10 近代への胎動』参照。

表 調査資料一覧

北見市立中央図書館	松平定信筆 蝦夷地一件意見書草案
北海道大学附属図書館	寛政五年異国人江被仰渡書并信牌
	ヲロシイヤ道具之図
	寛政五癸丑年異国人御応対場浜御屋敷右之外堅目南部津軽松前三家ニ而警衛之右大略之図
	異国人之絵
	異舶航来漂民帰朝紀事
	蝦夷地一件意見書草案1-4/松平定信
函館市中央図書館	神風記
	来夷秘実録
	異国船漂着一件
	樺太日露国境基石拓本
	分界私議
	寛政五年癸丑六月松前侯ヨリ魯西亜人へ被論候書
もりおか歴史文化館	松前陣立図
	蝦夷地元御備
	海辺防備意見書
	異国船ニ付公儀届出打合書状
	御境松前御加勢
	松前御用
	松前江御加勢御人数積
	松前江御加勢御人数行列
	蝦夷地並海岸警備諸備配当
	蝦夷地及海岸警備出張人数組立覚
	蝦夷地関係書上
	蝦夷地関係書上
	北地警衛関係記録
	蝦夷地御用留
	海防御留抜
	海防策
海防策	
海防弁	
宮城県図書館	田海録 29卷
	田海録續 33卷
	魯西亜諸書留寫
	魯西亜來貢紀事
古河歴史博物館	魯西亜言語集
	魯西亜国字学
	魯西亜字日本音訳
	ロシア地理書
	阿部伊勢守様御家中へ被仰渡候由在書写
	蝦夷地詰御役人
	魯西亜人丙寅秋唐太江指置書写
	〔フヴォストフ文書写〕
	〔フヴォストフ文書写〕
魯西亜俘虜記略	

	北寇秘録 ロシア人エトロフ乱妨一件
	蝦夷地一件 エトロフ乱妨一件 三
	[魯西亜人ガワビン外五人出奔吟味書付等書留]
	函館来瑳書類 上巻
	函館来瑳書類 中巻
	函館来瑳書類 下巻
	異国雑記・松前蝦夷
	北寇秘録 ロシア人エトロフ乱妨一件 二
	[北方民族雨天用外套および雪中外套之図]
	蝦夷地御用留
	蝦夷地私録・長崎渡来謁厄利亜船
	文化元年魯西亜使船 慶安三年阿蘭陀使者
	漂着異国人絵図
	露文字額
	ロシア文字手習い
	ロシア文字手習い手本
	ロシア文字によるイロハと数字
	室内履
大黒屋光太夫記念館	大黒屋光太夫・磯吉画幅
	漂流人帰国松前豎之図并異国人相形図
	ラクスマン信牌写 (おろしや国の船一艘長崎にいたるためのしるしの書)
	大黒屋光太夫によるロシア文字
	大黒屋光太夫の腕と匙
天理大学天理図書館	北狄事略
	蠻船風説
	出島之図
	ヲロシヤ人物并小屋内部
長崎歴史文化博物館	レザノフ之肖像
	ヲロシヤ風説書 文化元年子9月
	文化元年子九月六日入津おろしや船一件
	入津おろしや船一件 文化元年子9月6日 写本
	魯西亜滞船中日記 其2, 其3/自文化元年子10月至同2年丑11月
	長崎江魯西亜船渡来之節泰西船聞見録控 文化元甲子年
	魯西亜船入津ヨリ出帆迄記録 文化元年
	魯西亜船入津ヨリ出帆迄記録 文化元年
	魯西亜船渡来一件 文化元年
	魯船碇泊中追々御役人方御渡中之事日記 文久元辛酉年
	俄羅斯亜渡来書 文化2年
	魯西亜船始而長崎入津之節御役所附勤方並見聞書 文化2年丑6月10日
	魯西亜使節之役人御答書併国王より書翰之写 文化2年
	魯西亜人共蝦夷地ニ参り乱妨之節風聞書 文化4丁卯年
	魯西亜船風説書 文化6己巳年
	於江府被為成御尋候魯西亜之儀ニ付かひたん問答之趣奉申上候書付 [文化6 <sup>(マ)</sup> ]
	魯西亜人クシュンコタン遺文, 外
	英亜魯仏蘭金銀銭価附横文字和解